いきかう

十五

哥と詞を名にまつ

[V. 20]

PL788
.4
.G4
1654
vol.20
copy 1
Asian
Japan
Lage

LIBRARY OF CONGRESS

2004551302

25

源氏廿一ノ九月より冬はじまるまで　槿ノ斎院又ノ桃園ノ女院在之

斎院は晴れずくまで折りねかひよこさうし。おとづれ（源）
いのおぼしそめりおこく多くえぬれてまりて。
晴ともひあどいと志げうのさうて給。斎ハづゝうし（槿斎院心）
かりしこと紙おぼきばれ人ごともうちとけて
男し給いぼ。いとくちおしと思しけるおすがほに（源心）
女そ。もくぞの斎まつくり給めるとさって。女又（槿ノ）
（桃園ノ女うとし之）斎のそうろまおちすれば。そちるてのれとふてひよこと
つけてまうで給。古院のこのこゝちをだし。心ことも（桐つぼノ后門）
やんごとなくせひ男しのまへりしかば。今もきゝよく
つぎくま男しりりしおふめり。おちずしんでん志
（槿ノ方）（女五ノ宮）よしひんごしまぞす給けり。后もあれまかる

心ちして、衣ほけもひしめやかなり。こゝや女文 ゐい先ん
しまて此物語ゆゑ給いとふかめさうれけもひ。
しはぶさがちにおもす。このこゝろおもしまれど。
なおほ（た大臣）とのくこゝや（三文 葉上ノ山母ノ大文ノ事）ハおしまほしくおりがうさ此
ゑ様なるを。もてもなれと思ふけくかにこちく
しくおぼしまへるもさうかなり。院（女文詞）のうへ（桐壺帝）かくれ
まて後。よろげ心ぼそく覚し給りけるに。さしの
けもうまくに。いとなうぶがちまてすぐし給りを。
このこゝや（枇国）さへかくうちすてまへれど。いよくまさ
なれかにとまり給りを。かくこちよりとまを給に
なん。もれ口もれしめべく給りとさそし給。（源心）し

こくもかりのへるかなとせんぐ打りしこまりて院
かれのて後は、さ面ぐまつけてあるじ世のやう
まも侍らず、おぼしぬけ（ヒノ子）こまあたり侍りて、さらぬ
よままどひ侍りしを、さ面くおほやけまうぜ
まつられなりて、はまるさりこぐりいとまるくなど
して、年比も来りて、いましへの御物語をぞまさて
うけさ面ちらぬを、いぶきくおもひのへ、はたりつゝん
などきてし給を、いとも（女の詞）くあさましく、いづくるま
つけてもさぐめるさ世をおもるじさ面まてこのへ
すぐす、今ちがされうしめしきことおほく侍れど、
かてよまこちかへりのへるれよろづひまるん

ありしぞしごろをこなりさしてましかば、うち
おしうしましとおぼし侍るとうちわらくさまて
いとこさらにねびまさりたまひにまかれ、
わらはは抱しまへりしをこなりそめしとき世に
かかひかりのいでおとしたることく、おどろかれ侍
し紙とさぐこなるごとに、ゆくしく覚し侍りて
なん、内のうへなんいとよくはなしをまへると、人ど
さしゆるをさりともおとりまへらんとこそ、なし
たり侍れとおかしくとさてしまへばことにまく
さしひかひて、人のほめぬわざかれとおかしく
おぼしと出がりにまて、いたうちひろげをれ侍りし

年代のうちにしなくおさろへまて侍る物をうちの
れうちはいましへのうふもなしぶ人なくやとこ
そおりがうくこなり侍れおやしきれなしを
りはなんとこそこ給と紀ぐこなしばいとぐ
しき命やのび侍らんかふはおいをわすれうき世の
なげきこれさめぬる心ちなんとても又ない給こそうら
らやましくさるべきれゆりそひておうしく
こそてまつりのをうしやこ侍る此うをのひぬるも
さやうにそくひ給ありくありしかと思ひし給
まぞすうしこくとまり給さもさふらひなれなまし
なばいまはおもふさ夜に侍しましこれさしもれ

こをぬてとゝうしめしげる気色ぞこゝ字に結おなるこ志
れまへをこやまゝぬれば かれぐなる前栽（せんざい）のこゝろ
ぞへもこゝるゝ口こされて のどやかにちゞめ（樺ノ）ぬふ
らん れありさ雨かゝちもいとゆかしく長まて えゝ
ねんじ雨もで かく（添刊）さゝひこゝろつゐでとるし
ゆらんにこゝろぞしちきやうなるを おなる（樺）の れ
こゝひぞこゝぬべかりかりとてやがてすれこよ
ひこり結 くしうなりこる程なれど まび（樺ノ）色のこすま
くろきこ本丁のすきかげ長に とひ風な雨めしく
吹とをし けさひおしまほし すれこにかゝこちらゝる
れば こゝろのひさしまいれ（添と）なる をんじ（樺ノ和ゲリ）多いぬ

んして此をうそこゝさしも。いまさしてりしかく
しさ心ちすゝ三すれまへかれ。かゝさびてりけゝ年
月のらうかぞへられ侍りしいまはうちとゆゑ
さを語てんとぞこれ三侍けゝとて。おかぎおぼし
きりおりし世は三れ夢ゝ三なして。いまなんさ
めてもうなさまやとしひゐへさぶめがたく侍り。
らうなどは志げかゝやさぶめこさてしさすべき侍らん
とこさてしいぐしゐへりぢまこそさぶめがたさ世を
れとおうなさことまつけてもおぼしつゞけゝ
人志れぞ神のゆるしを侍しまゝこゝろつれ
なさよ紙すぐすれ。今はなまのいさめまかうたを

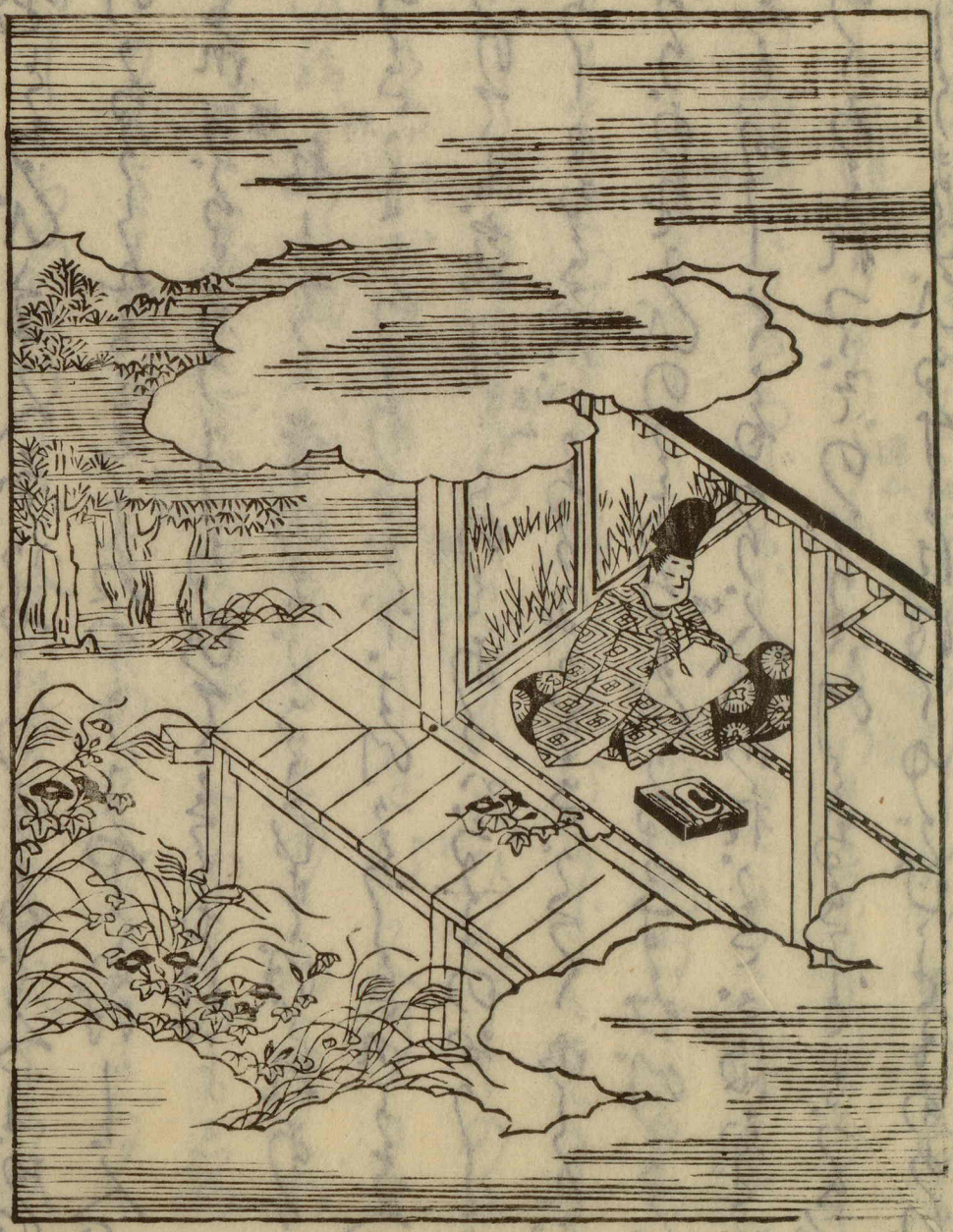
（源氏）（源氏）（源氏）（源氏）（源氏）

（槿をりの前へハ神のいさめもあらじとこ）

語りんとすらん。なべてよりつづらしきことさえ侍
ましし後。さ面ぐまさひぬへあれめしかれ。いかで
りさしとぞまとおれがちる事も語。地よういな
ども。ぞうしよりも今すこしな面めりしさけさえ
そひぬひるけるも。さるもいというしぬへど。ゆ
くゑのほどにはあれざめるも
槿なべて世の衰ぞうりをとゝゝまちひし
ことく神やいさめんとあれど。あれ心う。それよれ
何こいふれしなどの風にとぐへてきとの語。あひ
ぞやうもこゝれし。尼そぎを神いつぐ場りけん
などとうなさことをきこゆるも。槿ハまめやかにいと

さゝらつくしげなるれ（標ノ）あるまじき夜かさし月よ
こへても地かくのことひきいりぬて。えことし夜
すぬをとき（標ノ女だちだも）なりあやめり。すきぐしきやうなおり（添注）
めりをちど。あさもちなしずうちあげさそくち給つ。
（添ノ）よきひのけもりまた。おもなくまそあつわざぬなれ。
よきをしぬやつれを。うまぞとぶまさこしさすべく
やもまでなしのひけつゝそ。出給なずり。俄をききずで（地）
例のさそ（標ノ女だちだノ）おへり。おほくの道もおりしてほどなま。
本の築の香なひまつけてもずなまし思ぬ哀とり
久しつゝそのおりくおりしくも哀なる。かく
さし給しれ心だらへなどもさひ出ずなしさゞす。（添ノ）心やま

たてたち出給ぬるはましてねざめがちにおぼしつゞ
けたる。とく（係）こうしまいらせなて、紛繁をなぐめ。かれ
こう茶どもの中に。おさがれのこれかれにもひま
はれて。あるかなきかにさきて。自ひもことにかえ
れるをおしきなて（槿一）なれ給。けざや（久ノ羽）かなりしれもて
なしに。人はろきこちしはりて。うたろでもい
とゞはるゞ此ゝんじけんとねたく。されど
（係）こしおりの霧はしれぬおさがれのちれの
さりはなやしぬらん。としごろのはりも衣と
ぢりはさるとともおぼしたるらんやとなん。かつ
なぐさてしのへるを



を（槿ム）とるびこまへな此ふこのころどんな。おぼ
いかるらんもこしらぬやうにやとおぼし。人ぐ
もれすぐるとりまかるひてきしゆれば
秋（槿）そてく雪のまがきまむすぼれあるか
なきかまうつるあさがほ。まいかもしきれよそんな
つけても。露けくとのこあるハ。なまのおりしき
ふしもなき代いかるるまかをさがうく此らんぞ
めり。おをまびのこのなよびかるすみ。いきは
しも。おしくこゆめり。人（地）の此程。かさざ夜なぐな
つくろれつ。そのおりハいこなきともつきぐ
しうまひびなすまは。ぼくゆがむこともあめれば

こそ。さしらはかきまぶらりし。見つゝある
ともおほかりけり。ふちかへりいまさらは。よりく
しきれふしぐさなども。まげなさことくおぼせど。
なをうく芳（槿ノ）よりもてもなれぬれ乳色なるべし。ふち
おしくて色ぬりをしひつゝ。えやむまじく見さう
れば。さらかへりてまめやかに聞し給。ひんがしのる
いまもなれおもして。きむじ（撲ノ女だう）をむかへ（源ノ）いとかる
らひ給。さしらぬ人ぐれ。さしもあらぬさまし乃
ことをぶに。なびきやすなるなどはおやまちもしろ
べくめできしゆれど。こゝやはそのうしぶに。こゝのなく
おぼしもなれさりしを。今はましてこれもしひ

なるらべきれまでひ恋しまでだなるき本意につけ
られぬくちなどのおりすぐさぬもりかし、
やさしきなさけんなど、人のあはれをさそくり給
つゞらきけなべきれ気色もなければ、めりがたく
かなふ出家なりれ心だく人を。源ん よみ人ならり。めでた
しくもねくもさひ思ひ給。世中よもり思しなる。
前斎院（えさいのん）よねんばよ源ノ さて給へばあん。かめ家なども
よろしく思しさなりすげなりぬれおもひあ
らんなどいひけうせ。ぬいの紫ん うへもいらくへ給
ひそ。忍びしいさりとも、さやうなることもあるべ
源ノ つらてしいか思しく。とをばしきれどう、

つけなめげなる男にはなけれ。此(源ノ)気色あるどもれいとなまくゝ
あくがれたるも心うくすゞめくしきほどしつゝ
らんことは。つれなくてさふらはれんよいとひなし給けむ
まよ。わか(紫も柱も家ノ子なる也之)みすぢはまほしのんども。(柱ハ)たいしとはおぼす
ありやむごとなく男君なるは。此心ならでうつりなば。
ろしうもあべいかれど。(紫を源ノ)年ころのけはひなれなどて
などはさらなるべくさすがなるにひて。人は
さしけれんことなど。人とされどおぼしなげける。
ささえ名宮なるさなほ御なきて(源ノ)御なほし給をむずまじも。
いと心ちなきさなほまで。されるへるらしころの
ひつび。おれづましきことそはいみあるど。

満ぐはせかひこぞれ給はゞ。ころしさくここそ
うちゑじなずずくりしずこてあへまあやうき
つくしやおぼをば色はも出し給りず。(添)こしちうう
あすめがちはうちずこあげくあり。やくとりれ文を
うきぬ人げ。(紫心)は〳〵のことはむすしう御あじきなき
かり。嵐もそゞろにすゞめの人うしとうやましく
のこるひ早く給。(深ん)冬川かくれんわざなどもさありて
さびしきはつれづれとおぼしあまりて。(女なこ之)女御
宮は例のちうぐうまゐり給。雪うちつもりてえんあり
さそうれば。おもしろき折はあはれなるそゞども代。
つまし(く)さえおほし給て。こゝろにこるけしきしらし

ゆへれば、いとゞこころよそりたん人へいかゞとかえ
たる。さすがりまかりやまて、たるこそして給。如女志
家のなやまきてしゆふなりを、とかしひきてしる
なんとて、いいねたまへれば、うもやまし給まぎ、いつ
志をもてあそびまぎらしゆもすり、そぞめれたゞ
なしねなと、あやしくはかしこされかたれなころかれ。
つこもなしや、志用やきぞのあまりめなれこぞて
なくおぼさるしまやとて、とぐんなくなを、まるいかゞ
などきてしゆへば、なれゆくこそげにうきとおほ
かりかれとぞかりまて、うちそむきてかしゆへるへ。
こすてし出給こち和うれど、こやにはきうそこ

きてしまてげれば出(係ノ)ぬひぬ。(紫ム)りまけることもまけ
せをうしちまてすぐしけるよと。ひつぐてかし
まへり。(係ノ)まびうろゆぞどもなれど。いろあひかきなり
このましくなるく見えて。宮のひかりにいうじく
えんなるゆすがるをいづして。まことりかれま
さり給ひぐと。思びあへずおぼされ。(係)ゆどんなるぐ
志のびやかなるかぎりして。(羽)うちよりほかれあり
きは抱うき程になりにかりや。もしそのこ(女ヵ)ゑや志心
ぼそきさ由まて抱し給も。(地図)或ハ名のこやに。年ばい
ゆづりきてゆるを。(女ヵノ)今はこのむなどえしの給も。
ともりにことおしかれぞなど。人ぐにものの人

係ノ人ヽ付

なきど、いでやれすき心のふりがたきぞ、おろしられ
きずなめる、りろぐしきことも出きなんなどつぶ
やきあへり、宮(女)はいふかもてのひとしげきうるなる
れかどはいりこ(ほノ)ゐもんもうろぐしかれば、よし
なるがことくしき紙、人いれさをおひて、宮(女)のれ
りこるれをうそこあれば、かふ(女)しもいろり給も
しとおぼしけるを、おどろきてあけさを給、こかど
もりさむげなるけもひ、うほずきいできて、とこまも
えあけやらず、これ(ほん)よりほかれおのこちるなきなる
べしこほ(こえぞかり)ぐとひきて、ぞやうのいというくさびま
されば、あらずとうれふるを、おもれ(ほん)ときうしめす、昨日

まふと御ぼす程に、ことせのあるにも成りけり
（源氏ナより御家を云へ）
せのれ、かゝるをこゝろ、かりそめれやどるとなえ御もひ
とてぞ、本来のいろにもこゝろをうつしとゝ覚し
しらる、くらずさひに
（源）いのまゝにもぞがもとくひすぼれ宮ゆ
里とあれしかゝれぞ、やゝひさしくひさしろひ
あけていり給

女子
うやのれうるまれいのれまれがうるもこさてし給ひ。
ゆうことゞまれそこなくとなきうちなじめさてく
ひくしまへど。れ添ゑくもおどろかずねふさきり。
女子
女もあらびうちしまて。よひまどひをし給れば。
地もえ男しやらずとのまふほどもなく。いびきとゝ
ゑくしたるぬをとすれば。よろこびながらたち出る後
ちんとするままるいとゆうめしきしたるぶき
うちして。家りたる人ありりしこれど。こさてし
めしたんとこれこさてしさすをよるあるまれ
ともかずまへさを給ひぬるなん。院のうへはなどぞ
なとゞとしたるを給しなどなれり出ひり。ぞ。

ぬぼし（ほん）ぬ源内侍のまけといひしひとは、あまま
なりて、このえや（女々）のれでしまて、をこなふとさくし
かど、いゝ面まであらんたさづ。まり給はざりける後、
あさましうなりぬ。その（詞）世のことはえれむしがたりま
なりけを、たまうまたひ、ぬなもころぼそきま。
うれしきれこゑかれ、ぬやなしまふきうたび〳〵と
もぐらえぬへかしとて、よりねぬへるれけたひり
いとゞ（内侍ん）芳たひ、ぬつ、ふるまがたくなゝめりしさこさ
まままてなして、いたうまけえまたうちけさ。
たひやうこそづひの、さすがまたつきまて。
うちざれんとれ、ぬもへり。いひ（ほん）うしほどまなど

門侍ノ
男しかるまばゆきよ。今しもきたるおいのやうに
なぐほくえまれ給ものから。ひきうへこれも衣なり。
これさうりりいどこし女は更衣。あるかいひる
すしなく女ぬひあるはかひなくてたうなきよ
さずしへなふもあべかあり。人(なつが)の家なぐの此よ
きひよ。おさましとのゝおぼさるゝ。ふよ年の程ど
男れのうりすくなげさよ。心ぐへなども。抱たうなく
えし人のいさとまりて。のどやかなとなひとも
うちしてきぐしけるはなをすべてさぐめなさ色
なりとおぼさよ。抱あられなる此気色をうろとき
めきよ。門侍ノ心ひて。ぴりやぐ

円侍
風ふれどこれ歟こそつまこれねおやのおや
とかひしひとこと。とまこゆれば。係ム うとまし。そて
係
男をうへて後も待ちよこの世にておやをもて
あしこめしありやと。相これもしき歟ぞや。今のどか
にぞきてさすべきとてさらぬぬ。楚ましおもてまい。
見りうし。知りされど。ハ いとひきてしがみなんも
いかゞとて。ひと夜ふさ夜ハおろさぬ。月さし出て。
うすらかに川もわる雪の光にあひて。なかくいと
おもしろきよれさ夜なり。係ム あり川るおいらくのこそ
ろげさうも。桃学子を引り よりしぬもれ。よれさとひとりきこし
と。おぼしいでられてありしくなん。こよひはいとまめ

やかまさそしなて。ひ(羽)とことまつしなども人づて
なしでの給はせんを。せひこゆかしまもきんと。
ありこちてきめきそしぬへど。むかし(槿ム)我も人もワ
やかまつこゆかされこりし世にぞ。古家(桃園)などの
心よきあばしこりしを。れあるまじくもづしと
せひ望してやこましを。よれを思はさぶすぎ。つき
なきほどにてひとこ思もいとまばゆかしんとお
ぼして。さしまうぶきなきれ心なれば。あさましう(係ム)
つしとせひこそ給。さすがにもしこなく。さし
もなちてなどいあしぬ。人づてのれへりなどぞ
心やましきや。夜もいたうふけりに。風のけもひ

もぞしらて。まことまいと心ぼそく見ゆれば。さ面
かき間どまをしのぐひなて
つれなき(源)仮苦まこりぬころこそ人のつらさま
そへてつらそれ(司)ころげりしとのなひまさふりを。
げまかるもしいうしとへぐれいのさ也
わしさめてなまかはえんひとれうへりそ(樸)
まとさくしころがたりを。むかしまりたりことは(司)
なしいぞとさうてなへり。いふひなくていとまめ(源心)
やりまゑし罪。いで給も。いとつりくしきこうち
しなへぞ。いとかくよれたしまなりぬべきあり(司)
さ面もし給なよ。ゆめくいさしげなどもなれ

なれしやとて、ぞちまうちきめきかたしひたまへど、
なまごとふかあらん、人ぐもあれ（人ぐ刊）かたじけなかあれ
がちまなさけをくれてもまてなしきたし給へん、
かなしかなをしたちてなどいこし給ひぬれ乳色を、
心づくしうといふげ（撫）ま人のほどのありしきまも哀
まもおぼししぬまはあらねど、抱せひしかさ海に
こしなかとて、をしなべてのよれ人のめで笑ゆらん
つしまやせひなされむ、かけいかがくしきこころの
ほどもこゝろ給めべく、たづかしげなめる所有さ海
をとおぼをばおつしかんなさけもいとゞあひ
なし、よそのれかへりなどいうちたしで、おぼけりか

かまじき程にきこし給。人づてのれいへたしこ
ありしで思してん。年比しげこけるけしうしあふ
ぞかり。れをこなひをといおぼしてどこもかり
かゝれしとしも。もてもなれがほにあらんも。
中こいまめしきやうにこしきこして。人のとり
なさじやいと。よれ人のくちさがなさぬおぼしたり
ましかば。かつはきゝふ人にも打とけ給ふず。いとうれ
心づかひしぬひつゝやうゝれをこなひをのこし
給。れ（槿ノ地）もしかりのきんたちあまたもれしの人ど
ひとれれもしなるものゝいとうとくしたくこや（桃園ノ）のうち
いとみすかにゆゝまゝにさばかりめでたき人（源）をい。

わんぐろまれ心をいろし罪しなんがこれひところを
よきこさこゆるもひとろころとこゆ。おとぐ（添ん）もあれ
がちまなげしいるくらしもあしもど。つれ（槿ノ）なきれ
気色のうれさきまけてやこなんもうちなしく。
げまえる人のれありさ夜ふれなげしことりあら
まほしく。まれなふくなげしさり。世の人のとあり
かうけぢめもこさあつめなて。苦よりもあまるん
まさりてなげさるれが。今さらのれあぐけも。かけも
世のもどさをもなげしながら。むなしうんもい
よいよ人にしへなるべし。いうまをんとれころろ
うぐさて。二条院まゆがれかさの結を。女君（紫ん）ハ気も

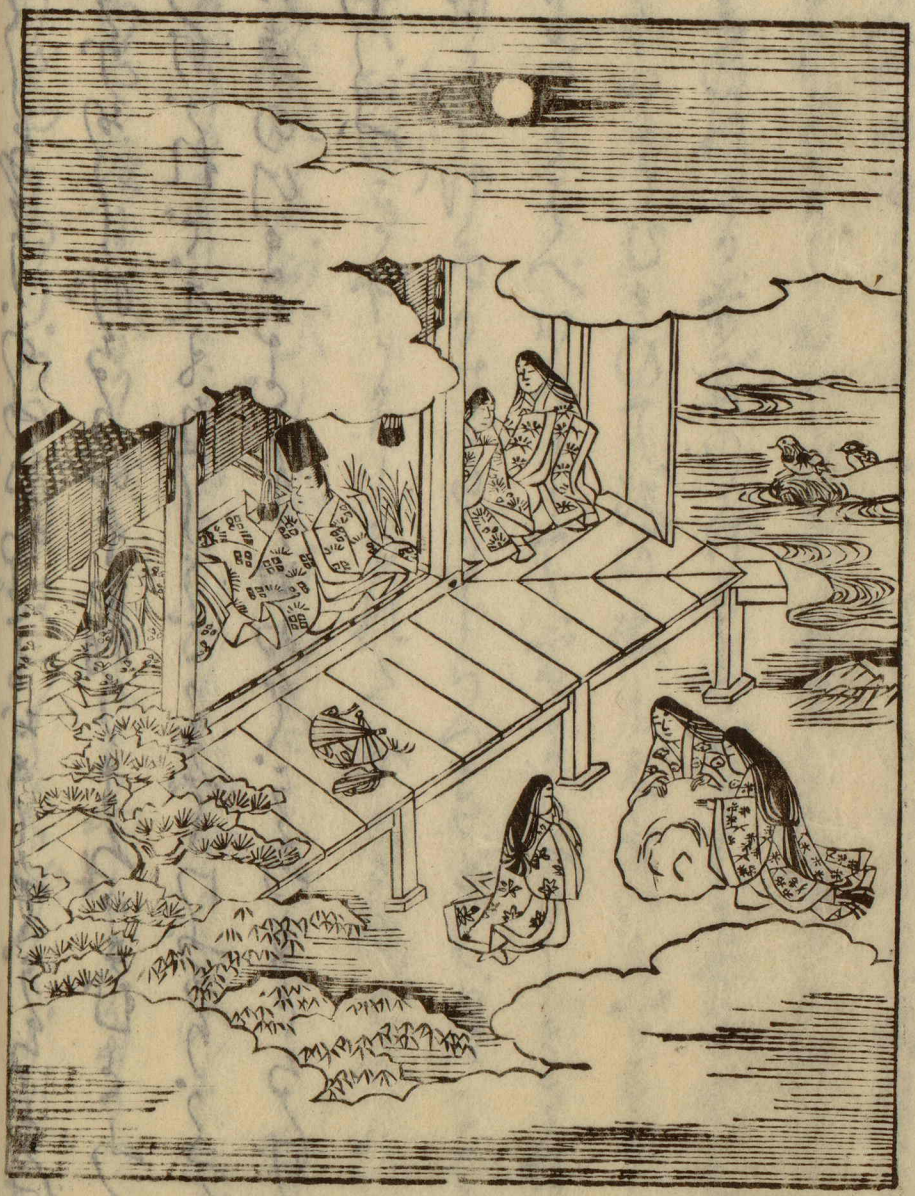
ゆれまつくのミおぼしき。志のびたまへどいかゞうち
こぼるゝおりもなからんやあや（源詞）しくれいなしぬ（紫ノ）
気色こそ。心えがたくなれとて。ぬぐしなきやるけく
いとおしとおぼしたるさ面も。恋（地）るかくまほしきれ
おもひなり。家（右ノ）うを（源詞）ぬて後。うへ（冷）のいとさりぐし
げるのミ世代おぼしたるも。うろぐるしうこまる。
おぼ（九大同）さおとゞも地し給ひて。こゝもづる人なきこと
しげさまなん。この頃どれたえ面などに（紫ノ）こゝもしたぬ
ことをおぼすしんもことをりに表なれど。今ハさり
とも心のどうをおぼさおとなびなひたあれだまぐ
いとさひやるもなく。人の心もこしらぬさ面にもれ

し給こそらうしけれなどまろかれこれひこい
がこひきつくろひのへどいよく（悪ノ）そもしさそ　もれも
きそし給ひず（源行）いといたくけるびのへなりもらがなら
もしさそしこそぞとて　つゐなきこゝまくまで心
をかくしも　けぢきなれけざやと　何ハ打なるがゑん
給　（槿源行）秀院まもりなしごとさゝやかや　もし笑しひが
むかるゝあり　それハいとまてもなれこそことぞよ
をのづからこのひてん　芳よりこゝまうけどをきれ
心ぢへなりを　さうじくしきありく　ゑめぐなりしで
笑しなやますよ　しこもつれぐにまれし　給所
なれば　ゑ面さのれいしへなどしこまへどまめく

しきさき海にもあしぬをかくなんありしもうれへ
きしゆべきことにや、いうしろめたうはあしじとを
おもひなをしたまへなど、日ひとひなぐさめ罪
給雪(地)のいたうかりけりたうへに、いまもちる
つ松と竹とれけぢめおしうこゆかタぐれに
人のゆくちも光まさりてこゆ、時ぐにつけても
人のうろをうつしめる、菜もみぢのさりよりも
冬の東のすめる月に雪のひかりあひたる色とそ
あやしうゆちなき地の身にしてこ、此世れ月の
ことまでしひちがされ、おもしろさも哀さも知しぬ
おりられ、すき海じきためしてりいひをさけん

人の心あさくよとて、こすまきあげきを語。月はく
まるくさし出て、ひとろ色にこえいてされたるに。
しほれたる前栽のけいろぐるしう。やり水もい
といたうむきびて。池の氷もえもいたずしぐさ
に。いしもべおろして。雪まろぐしきさせ語。
おしげなるすがたりしらつきどもに。月にまちへ
て。おほきやうりなれたるが。さ夜ぐのあこめ
こぐれき。おびしどけなきとれぬしぐるる夜
めいたりしこよなうあまれなりこのまゝ忍。
ろき座に。まして。もてもやしなるいと
けざやかなり。ちいさきは。いしもげて。よろしび

ちしなり。おふぎちどもおさして。うちとけ
がかおしげるりいとおほうまろばさむとつく
つけがれど。えもなしうごうさでつぶめりかうん
は東のけまちどうり出ゐて。うろまとちげま
つふ



源司　若つがくす
一とせ中宮のおまへに、ゆきの山にくれたりし。
よまかりたりことなれど、れめづらしくもたるれ
ことに成たるしまへりしかれ、なるのありくにつけ
ても、口おしうあらずもあらかれ、いとけどをく
まてなしまて、くそしきれありき面をこゝなるし
なりしことはなりしかど、れまじらひのほどに、
うしろやすき地には見しかりさうしうちたれ
と罵てどあることかうかりにつけてなるにとも
こゝてしかひしに、もていでくらうくしきことも
そし給はざりしかど、いふかひありてもふき面り、
もうなきことつぎをもしるし給しいやうに又

さぢりの女ぐひありなんや。夜もしらまをびれたる
抱かゝ。ふりうりしづさたるところのおしびたすく
もれし給しを。さみ（笠ノ字）こそいさいへど。ぞしさきさ志
ゆへこまなるらずもれし給めれどもこしまぢら
りしさけそひて。かぞくしされすこしまへるや
ろうしかゝん。前（槿ノ字）秋院のれころぢへも。まるさ両こと
まぞこゆる。さうぐしこまなるともたすくとも
こそしあまを。我もころづひをしらべきれあるを。
こゞこれひさくころやとのまゝ。ありぬへんとの給。内（笠ノ字）
侍（膨ノ字）のみこそいらうくしくゆへくしこさう
さい。へりまさりぬへれ。おさもちなるすぢなど。

手九

もてえるれぬへりける人のれこころをおやしくも
きけることだかれとの給へば。さうしな（勝ノ事）面めりしう
うちうちさやのあしまはおなをひき出しべき人ぞ
かしぎもしふまはいとおしもくやしきことれ
おほうかれ。まいてうちあぐけすぎこそ人志。年
何もりしまるいうまくやしきことおほうしも。
人よりはこよなきしげけさとおもひしぐるなど。
のこまひ出て。（勝）かんの君のれことまも洞をこしも
おとしぬひ。このすぎまもあらずをとし。光給
山里の人（明石ノ事）それは男の母どまはやくうちすぎ。もの
心なしとえしべかれど。人まうことなる人を拙なれば。

さひあがれ身さ海をもこけらて侍るかれ。いふかひ
なれこさもの人はまぐこぶ。人はすぐれたるはかたさ
世なりや。東の院になるがまゝる人（絶ちるる）のころぞ人こそ。ふり
がたくらうたけれ。さもる。さしまえあらぬもれを。
さうかるまつけての心ぞを。人まとるをけしこそめ
しより。おなじやうまゝ紙つまりしげまおもひて
すぐぬるまいまもる。うたこまそむくべくもあらず。
かうう衰とさひ侍るなど。昔今の此抱がたりは秘
かけゆく。月いまくまこて。さけかま面白し。女（笠）
氷（笠）とぢいしまれ。あはりなやこ元まむ月の
かげぞながるゝ。と紙（分）こいぐして。まうしかるふさ

まへるほどまる（添ん）抱なくうけくしげなるまかんざした
まやうのこひこさしまる人（右つぎ）のおもげまふとおぼして
かでなれがいさくかつくれこくろもとるかさる
けべしどしのうちなさるる

（添）うきつめて世こひしさ雪もかま衣をそふる
をしのうさねかいりまひても（右つぎ）宮のれことをしひ（添ノ）
いくおほとれごまれるまとともなくほのるまみな
ほをいうじくうしこまへるれ乳色まて（訂）しさじと
の（添ノ）給しうどうさんのくれなりかれどばげか
しうくるしさめをこるまつけてもつくなんと
の給れ（添ん）いくへきしまとおぼしまをそそるく心ち

して、女恵（紫詞）のこゝろなどうくいとの給ふ。おどろきて（係ん）、
いうじもくちおしく、むすめのをさ所なくさゝげぞ。
をさへて、泪もながれ出ぬり。今もいうじくぬらし
そへ給ふ。女恵（紫ん）いるかことゝまうとおぼしまふ。うちもゝ
じろうでかしぬへり

とけてわぬ祿笑さびしさ冬の夜ふむ
ぼれける夏のうじうさ。中（ん）くあうぜかれしと
おぼしまよとくおさめて、さといなくて、所ぐにはず雅
などをさせ給ふ。くるしさめうを給とうしこゝのへるも。
さぞおぼさるゝんかし。をこなひをしぬひよろげに
へこゝろげなりしはありさ夜ながし。このひとろ

ことにてぞ。このよれにぞりをすくぞ給はざんと。
物のころをふくおぼしたどりに。ひとしくなし
なれば。なにはぎをして。志ら人なさせいりおは
すんをとふしひ男にまうでく。けしにもかたり
きてしぞやなど。つくぐとおぼせ。かれ此ゝあり
とりたてく。なにはぎをもし給ふんは。人やうがれ
きてしけべし。冷うちにもれころのをよく。おぼせ所や
あんとえしつむほどに。おしぶほとけを心り
かけてねんじまり給。おなじたちすまとこそは
源なさ人をしたふころにまうきてもかげ
ぬ事れ泄せにやまどりんとおぼせぞうりけりとや

69038
6AP7B